



クロードは、大陸の七分の一を版図とする大国である。

大陸西端沿岸部に位置するため、「暁の帝国」と呼ばれることもある。

東から延びるミネ河が大西海へと流れ込む、その河口湾の畔にある帝都クラーケンは、百万を超える人口と長い歴史を持ち、富と文化が爛熟する。

名の由来は、帝姓のクロードと音を通じ、また「大西海の覇権を象徴し、さらに巨きく広がっていくもの」の意から、初代皇帝が命名した。

総面積は人口相応のものであり、大きく三つの区にわかれる。

広い方から順に、まず平民たちの住む一般区。ミネ河が作り出す三角州の中にあり、周りにはのどかな水田が広がる。東方伝来の米が栽培され、帝都の人々の腹を満たす。

続いて三角州の外、河口北畔にあるのが、海洋交易の大玄関口である港区。

そして最後に、そのお隣が中枢区。

どちらを見渡しても貴族や大商人たちの豪邸が並び、馬鹿げたほどの敷地を持つ各州上屋敷が点在する街並みは、荘厳華麗な帝宮とその庭園を核に綺麗な円状に広がっている。通りは

尽く大きく、立派な馬車が何台でも行き交うことができる。もし戦場になった時、全く防衛に適さない地形とも言えるが、この帝都まで攻め込まれることなど絶対にないという尊大さを、街そのものが発しているかのようだった。

レオナートやシェーラ、騎士隊が起居するアレクシス州上屋敷もまた、その一角にあった。

亡きロザリアの好みを反映し、広々と機能的ではあっても華美さを欠いたその屋敷に、午後一番から客が来ていた。

より正確には使者である。実父からの。

眉まで白いその男は、先代からクロード皇帝に仕える侍従長だ。デストレント侯爵家の縁に連なる貴族で、皇子のレオナートよりよほど傲然と構えていた。皇帝の使者たる権威を振りかざし、客間にレオナートを跪かせて、大威張りで書状を読み上げる。

「ザーン州に蔓延る匪賊一党を討伐した功により、帝室伝来の宝刀を下賜するものである！」侍従長は書状を丸めると、一振りの軍刀と一緒に、横柄な態度で差し出した。レオナートは畏まってそれらを拝領する。

どんなに威張り腐られてもしおらしくしているのは、レオナートに後ろめたいところがあるからだだった。本来なら帝宮に参内し、皇帝に謁見し、報告をした後にお褒めの言葉をいただくのが通例なのだが、母親の葬儀にも来なかったような男と可能な限り顔を合わせたくなかった。ゆえに、侍従長にわざわざ拙宅まで御足旁願っている格好であり、このくらい威張らせてや

らなければ失礼だと思っていた。

侍従長を見送った後で、下賜品を試しに鞆から抜いて検める。一目で気に入った。

普通の拵こしらへとは大分違う。刀身は長く、分厚く、刃渡りも広い。良い。実用一点張りなのが大変に良い。宝刀の類とはとても思えないが、正直、儀礼的な剣など要らない。

いつも仏頂面のレオナートが意気揚々と、早速にして腰に佩く。討伐の功に対して、褒美が剣のたった一振りとは、値切られているのだろうか？

否である。わずか数百人規模の匪賊退治ならこんなものだ。

レオナートが「雑種」だからと言って冷遇されているわけではない。

むしろ毎回、何かしら気の利いたものをくれていたから、意外と律儀だとすら感じている。従軍した騎士たちにも、ちよつとした恩賞金が出る。

ただし、それで全く困らないというわけではない。数百人の騎士を地方まで遠征させるには莫大な金がかかるし、所領を持っていないレオナートには賄える基盤がない。

ではその戦費をどう確保しているかというところ——

支援者がいるのだ。レオナートたちの構想を理解してくれる、志高き貴族が。

今日はこの後、その彼に会いに行く予定だった。

見事な黒毛の愛馬に跨り、レオナートは港区へ向かう。

帝宮の厩舎には献上された百頭以上もの名馬がいて、中でも最も速く、最も強靱で、最も賢いと同時に、最も気位の高い牝馬であった。

名をザンザスという。

初めて匪賊討伐をした時、褒美として下賜された。

レオナートほどの馬術達者、且つ剛力の持ち主でなければ到底駈することはできないじゃ馬なので、厄介払いだった可能性も否めないのだが。

港区は帝都でも一番にぎやかな街である。

綺麗な格子状に造られた通りを、数えきれぬほどの人々が溢れている。

中樞区から買物に来た富裕層の主婦たち。

一般区からちよつとワルい遊びをしにきた少年たち。

馬車の荷台にコーヒー豆を山と積む、南方帰りの西方商人。

その周りをあくび混じりに警護するのは、北東人傭兵たち。戦いになれば、まさしく目が覚めるような強さを発揮すると聞く。

肌も露わな格好で表を歩く中央人の舞姫と、口説き方すら生真面目な北方人旅行者。

赤銅色の肌の南方人と、黄味がかかった肌の東方人の仲睦まじい夫婦。その真ん中で幸せそうに笑う娘の肌は、淡いオリーブ色だ。

また通りの左右に目を向ければ、多種多様な店が視界の果てまで立ち並ぶ。

威勢のいい雑貨商が広げる店先には、大陸中の珍品がずらり。

仕込み中の酒場には、ありとあらゆる酒が運び込まれる。

娼館の窓からは各地の美女が顔を出して妍を競い、生国訛りで道行く男たちを誘う。

まさに人種と文化の坩堝といえよう。

ただし実は、このような盛んすぎる異文化交流は帝都クラーケンだけの特色ではなく、ある程度大きな街ならば、大陸のそこかしこで見られる日常にすぎない。

歴史を遡ること、およそ三百年前の話である。

史上初めて、単一国家による大陸統一が果たされた。

その覇業を成し遂げた渾沌大帝は、瞳の色が変わる黒髪虹瞳の異相と、極めて開明的な思想の持ち主だったとされる。土地をこそ、尽く侵略したが、文化侵略は最低限度に留めた。讃えられるべき度量と美意識でこの世にある万物を愛で、貴び、民にもその素晴らしさを分け与えた。

渾沌大帝によって大陸全土の人と物と文化がかき回され、渾然となったのである。

今日、西の民が米の旨さを知っているのも、逆に東の民が葡萄酒に酔いしれることができるのも、北の男が南の女を美神ラクシュミに例えて口説くことができるのも、全て彼の進歩的な治世のおかげというわけだ。

多文化主義をさらに踏み越え、空前の規模で行ったこれを、後の世の史家は「世界文化主義」、

あるいは「渾沌主義」などと呼ぶ。

逆に、渾沌大帝が被征服民に統一を強要したのは、たった三つ。

まず度量衡や暦などの単位制度。及び貨幣。これは経済発展のためには致し方ない。

また彼の生国の言葉を、公用語として大陸全土に普及させた。

ただ、そもそも外来語を柔軟に取り入れる特徴を持つ言語だったため、語彙レベルではその土地の言葉を取り入れ、地方ごとのアレンジが進み、一種の訛りとして差異は生まれている。最後に宗教。

各地の土着信仰を可能な限り尊重しつつ、渾沌大帝自身とその末裔を現人神とし、全ての神々の上位存在と据えた。これには反発もあつたが、特権を死守しようとする各宗派の僧や神官を一掃し、彼らが貯め込んだ財貨を民に還元したら、不思議と収拾していった。今日、大陸全土で多数の神が穏やかに信仰されるようになったのは、これが始まりである。

それほどの影響を世界中に与えた大帝国も、渾沌大帝という希代の英雄の死後、急速に衰退し、わずか四代・百年で終焉している。結局は七つの帝国に分裂し——クロードもアドモフもその一国だ——互いに覇を争う、群雄割拠の時代が復活した。

しかし、時代が変われど渾沌主義の恩恵は大陸全土に定着したまま、二百年後の今の世にも残ったというわけだった。

レオナートが訪れたのも、東方眞帝国チ エの建築様式で作られた大店の酒家レスランだった。瓦が並べられた屋根のあちこちや、廊下のいたるところにヂェンの瑞獸ずじゆうを模った置物が飾られ、商売繁盛の神が祀られていて、東方情緒たつぷり。にぎやかで粋。

「凝った趣向の店だな」

レオナートは給仕娘に案内された個室の中、席で待っていた青年に声をかけた。いかにもおまえらしい、と。

「帝国随一の勇者たちをねぎらうんだ、おざなりにはできないさ」

貴公子然としたその彼は、酒腕におどけてみせた。

アラン・エイドニア。

二十二歳になったこの親友は、女ならまず放っておかぬ甘い顔にほのかな精悍せいけんさも備えさせていた。先年、父親を亡くし、伯爵位を継いだことで貫禄がついてきている。

無論、構想を理解してくれる支援者とは、このアランに他ならない。

彼は面白そうに目を細めて、大窓の外を見物しているところだった。

レオナートも対面の席に腰を下ろして、做う。

この店は建物の形も特徴的で、上から見ると「ロ」の字をしている。真ん中部分が庭になっていて、二階にある全個室から眺め下ろすことができる。

今は旅芸人の一座が、喜劇を演じているところだった。

先に来ていたアレクシス騎士たちが、そのすぐ間近で笑い転げ、やんやと喝采かっさいを送っている。今日この店はアランの貸切。

ザーン州より凱旋がいせんしたレオナートたちを慰勞してくれる、そういう趣旨の集まりだ。

アランは気さくな男で、戦費どころかそういう心意気もたつぷり持ち合わせた奴なのだ。

「いつもすまん」

「気にするなよ、友達だろ」

アランが自分の杯にはエイドニア産の葡萄酒を、レオナートの杯には地のライム果汁を絞った水を注ぐ。何を隠そう、レオナートはいい図体をして下戸げこだった。

「それに、こんなことしかできないのがもどかしいよ。叶うならば、僕もまた君たちと戦場を駆けたい」

「あまりやんちゃを言うな、エイドニア伯」

そうだね、とアランは寂しげに微笑ほほえんだ。それから、

「アレクシス騎士隊の武運に乾杯」

「エイドニアの泰平に乾杯」

レオナートはそっと杯を合わせる。アランもそれで気持ち切り替えた。

晚餐ばんさんには早すぎ、籠かごに積まれた旬の野母さかなを肴さかなに観劇と歓談。

「ほら見ろよ、レオ。あの娘役、あんなに若いのに上手い。しかも美人だ。これはよほどぞ」

「ああ、上手いな」  
 「しかも泥臭い役を厭わない根性がいい」  
 「ああ、いいな」  
 「はははは！ 聞いたか、レオっ？ 『ゴリゴリして痛い』だってよ、『ゴリゴリ』！ いったいどんな胸をしてるんだっ、あはははははっ、これはケツサクだっ」  
 「ああ、おかしいな」

アランは自身こそが役者であるかのように表情豊かに抱腹し、レオナートは母親のお腹に愛想を置いてきたかのような顔で身動きもせず観続ける。

すると——ドアのない出入り口の方から気配がして、

「うふふ。レオ様とアラン様の会話の方こそ、よっぽどおかしいですよ」

シエーラが忍び笑いとともによつてきた。

その隣にもう一人。トウは立っているが、すこぶるつきの美女もいて、

「無口な殿下とおしゃべり好きなアラン様を足して割って、ちょうどいい塩梅じゃないかしら」

軽口を叩きながら嫣然と会釈した。

「実際、レオナートもアラン以上に馬の合う奴を知らない。クロードに二百家門ありしと言えど、自分と気の置けないつき合いをしてくれる物好きな貴族もこの青年だけだった。

アランは笑いすぎて目尻に溜まった涙を拭いながら、シエーラの隣の女に声をかける。

「上手くて美人の、よい役者が入ったじゃないか、ダリア」

彼女は中庭で演劇中の一座を鑑める、座長なのだ。同業者の間で一目置かれるほどの顔役でもある。ダリアの一座は主に帝都から北を巡業し、その実力ゆえにアレクシス州で興行した折はロザリアが囂屑にした。レオナートもシエーラもアランも、侯爵夫人のお伴でよく見物した。そういう縁があつて、この三人とは古馴染なのである。

そして、今やシエーラの構想の協力者でもあるのだが、この日はただの興業で来ていた。「上手いのは確かだけれど、女は白粉で化粧すわよっ」

ダリアはからかうようにアランへ答える。

生来の気風のよさか、伯爵様に対する口調に遠慮はない。こういうところをかつてロザリアは好んだし、レオナートも嫌いではない。

アランとこの女僕の談笑に、横で耳を傾けているだけでも心地よい。

「へえ！ そんなことを言われると、いちど素顔を見てみたくなるな。もっと傍で」

「ベッドの上で……なんてお達しじゃなければ、今すぐにでも」

「ははははっ、ダリアのところの商売は芸一筋だつてのは、僕も承知してるよ」

「アラン様は遊びもお上手で助かるわ」ダリアはそう言いつつ、なぜかレオナートの傍にやつてきて、「でも殿下でしたら、商売抜きでおつき合いたいわ？」なぜかしつとりとした態度がかかってきた。

「でつつつ、殿下はダメですよ姐さんっ！」シエーラがいきなり素っ頓狂な声を出して、慌てふためいた。「遊ぶならアラン様をあげますからそっちでどうぞ楽しんでくださいっ」

「は、僕ならいいのかい？」

「いいですっ」

シエーラはそう言いながらレオナートの傍までやってきて、腕を抱くようにひつつかんで、反対隣のダリアを睨みつける。

少女の剣幕のすごさを見て、ダリアとアランは同時に嘖き出した。

「何がおかしいんですかあああっ」

「鏡を見てごらんなさい。シエーラちゃん、必死すぎ」

「かつ、からかったんですね、姐さんっ」

「君がよほどの軍師殿だというのが、僕は時々信じられなくなる」

「アラン様までっ。もうっ」

シエーラは拗ねまくりながらも、とりあえず剣幕は収めた。

ダリアはレオナートから身を離れたが、シエーラは腕を離さなかった。

そして、場が落ち着いたので見計らって、レオナートはダリアに言った。

「悪いが俺は、アレクシスを取り戻すことで頭がいっぱいだ。少なくともそれまでは、誰かと男女の仲になる気は起きない」

真剣に考えて、己の裡から出てきた答えを包み隠さず。聞いて、ダリアとアランは同時に目を真ん丸にした。

それから、さっきの比ではない爆笑を始めた。

真面目に答えたのに。レオナートは慥然となつて隣に訊ねた。

「……何が悪かったのだ、シエーラ？」

「いいえ、いいえ、レオ様はどうぞそのままですらしててください。シエーラがずっとお傍におりますから何も問題はございません」

シエーラはひどく安堵し、また満足げな顔で、つかんだレオナートの腕に頬すりまで始めた。レオナートがいきなり何をと困惑してもシエーラはやめない。

「ホッとした気が抜けちゃいました」

何が彼女をそこまで安心させたのかは朴念仁にはわからなかったが、「気が抜けたら頬すりを始めるのか……？」

「猫が気まぐれにじゃれついでるとでも思ってください」

「意味がわからん……」

「にやんにやんっ」

答めてもシエーラはふざけるばかりで、レオナートは弱る。乱暴に振り払うわけにもいかず、アランに目で助けを求める。

「お代わりをもらってきてくれるかい、シェーラ？」アランは空になった野苺の籠をぶらぶらさせた。「レオのために美味い<sup>おい</sup>のを見繕<sup>みと</sup>ってきてくれ」

「はいっ、ただ今っ」シェーラは喜び勇み、風の如く部屋を飛び出した。

「さすがはアラン様、見事なあしらい方ですこと」ダリアが喉の奥で笑った。

全くその通りだとレオナートも思う。時々自分は、人の感情の機微や綾<sup>あや</sup>が読み取れないことがあるのだが、そんな時、アランに助けを求めるとすぐに紐解<sup>ひもと</sup>いてくれるのだ。

レオナートは己の不甲斐<sup>ふがい</sup>なさに嘆息しながら、

「いつもすまん」

「気にするなよ。友達たる」

なんでもないように言う四つ年上のこの青年に、一生頭が上がらない気がした。

そんな風にレオナートたちは、匪賊討伐に明け暮れる束の間の、休息を享受<sup>きょうじゆ</sup>していた。

そして、彼らが二階の個室で欲談<sup>も</sup>していたのと同じころ――

一階の玄関で、店主が平身低頭する採め事が起きていた。

「大変、申し訳<sup>わけ</sup>ございません。本日は終日、貸切になっておりまして……」

だから、またのご来店をとお願<sup>ねが</sup>いしているのだが、その客は納得しなかった。

「オレはクリメリア伯爵家の嫡子<sup>ちやくし</sup>だぞ!? それを門前払いすると言うのか!？」

でつぷりと肥え、また若そうなのに体の弛<sup>たる</sup>みきつた男が、唾<sup>つば</sup>を飛ばしてわめく。

貴族なのだからどんな横暴も押し通ると、信じきっている表情は醜悪極まりなかった。

大勢の取り巻きを従えて店主を恫喝<sup>どうかく</sup>する様は、町のチンピラと変わらない。

「し、しかし、貸切なさっているのも、エイドニアの伯爵様で……」

店主は苦肉の策でアランの家名を盾にし、お引き取り願おうとしたが、

「なんだと!? 我が伯爵家より、アランの家の方が上だとてもほざくのか!？」

その太った貴族は余計に怒り猛<sup>もう</sup>ってしまった。

店主が失敗を悟った時にはもう遅い。

「こんな侮辱を受けて、許しておくものか!」

太った貴族が腰の剣に手をかけた。

店主は真<sup>ま</sup>つ青<sup>あお</sup>になって卒倒<sup>そたう</sup>しかけた。

その時<sup>とき</sup>だ。

「そこまでしておけ、ケインズ卿<sup>きんすけい</sup>」

取り巻きたちの中から、涼やかな声<sup>こゑ</sup>がした。

ケインズと呼ばれた太った貴族が、大慌<sup>おどろ</sup>てで劍の柄<sup>つか</sup>から手を離す。声に従う。

それで店主は、この男たちはケインズの取り巻きではないのだと知る。

その涼やかな声の主こそが、一同を従えていたのだ。

よくよく目を向ければ、声同様に端正な顔つき、金髪碧眼の青年だった。背が高く、均整のとれた体つき。理知的且つ雅びな眼差し。最上等の絹で仕立てられた服装や、金銀細工があしらわれた腰の剣以上に、彼自身の堂々たる物腰でやんごとなき身分であることを証明する。着飾った豚にしか見えないケインズとは格が違う。

「シャルト殿下！」

と、畏怖すら込めてケインズが呼んだ。

すなわちこの青年こそが、クロード帝国第二皇子。

シャルト・デインクウッド・クロード・ソーマ。

凡庸の見本のような第一皇子と違い、遅れて生まれてきたことを多くの者に惜しまれる、英才として知れ渡っている。

母親違いの第一皇子と同じ日に、数時間遅れて生まれたというのだから、余計に惜しむ声は大きくなる。ほんの少し運命が違えばシャルトこそが皇太子だったのにというわけだ。

実際、レオナートを含め十人いる皇子の中でも、シャルトの声望は帝宮内で際立っている。

文武両道に秀で、とりわけ帝都の軍学校を主席で卒業した実績は目覚ましい。

加えて、その強力な後盾だ。彼の祖父をデインクウッド公という。

この帝国にたった四人しか存在しない公爵の一人であり、北方貴族の盟主と目される大貴族。まがりなりにも伯爵家嫡子であるケインズが、低頭するのも至極当然だった。





そのシャルトが、  
「愚弟と同席では興醒めも甚だしい」  
悠然と店の二階を一瞥すると、踵を返す。

店主はぎよっとさせられた。レオナートの来店のことは一言も触れていないのに。

「また来る、店主。その時は馳走を振る舞ってくれよ。」

気品とはこういうものだ、子どもでもわかる優雅さで去っていくシャルト。

ケインズら取り巻きがいそいそとその後を追う。

店主は何をされたわけでもないのに、まるで九死に一生を得たような気持ちで、その場へ  
たり込んだ。

「まったく憎つくきはあの雑種ですぞ！」

ケインズが声高にわめき続けた。昼食の当てが外れたその帰り道だ。

「そして腰巾着のアランに、田舎騎士どもめ！ オレはともかくとして、シャルト殿下に門  
前払いの無札を働いたようなものではありませんか」

それが絶対に許されない不敬であるかのように憤り、抜け目なくシャルトを持ちあげる。

他の取り巻きたちも大いにうなずく。

「あの雑種ども、最近、調子に乗っておるのでは？ 匪賊の如き烏合の衆を討伐した程度のこと

とで、道理もわからぬ愚民どもに持て囃され、己らの分際を忘れておるのでは？」

毒づき続けるケインズの言葉聞いて、シャルトも思う。

二年前、彼や祖父が属する「四公家」の策謀によって、レオナートらは兵糧攻めに遭った。  
おかげでついた吸血皇子の異名は、帝都の民にとつて侮蔑と嘲笑の対象だった。

それが二年経ったこのころは、すっかり見直されている風潮をシャルトも肌で感じていた。  
ケインズが立ち止まって地団駄を踏みだす。

「ああ、面白くない！ それもこれも腰巾着のアランめが、あの雑種めにせっせと軍費を買い  
ているからです！ さすがはエイドニアの血統、なんとる蒙昧！ なんとる愚行！」

それを見てシャルトは思い立った。

「確か卿のクリメリアと、エイドニアは因縁浅からぬ仲であつたな？」

「そう！ そうなのですっ！ お聞きください、殿下！」

クリメリア州とエイドニア州は領地を隣接させている。そして、両州の間には湖が横たわり、  
漁業権を巡って代々両家の諍いは絶えない。どっちが悪いという話でもないはずだが、ケイ  
ンズはさもエイドニアのやり口が海賊の如きだと主張した。

シャルトはケインズ程度の口車に乗せられる男ではなかったが――  
「エイドニアの不義、見過ごしてはおけんな」

涼やかな声でそう言った。

「おわかりいただけますか、殿下！」とケインズが目を輝かせる。

「ああ。私力が貸してやる。早速、皇帝陛下に嘆願へ参るとしよう」

「あっ、ありがたき幸せ！ ふはははははっ、これでアランは破滅だ！ くふっ、くふふっ、雑種や田舎騎士どもの、似非英雄気取りもこれで終いというわけですなあ！」

醜く肥えた腹を抱え、揺するように大笑するケインズ。

シャルトは冷やかな横目でその様を一瞥しながら、明晰な頭脳を回転させ、エイドニアを焼き滅ぼす算段を組み立てていった。



アランは亡き父を尊敬している。

領地を愛し、領民を大切にした父は、間違ひなく貴族の鑑。

四公家が相手でも屈しない胆力と、ロザリアのアレクシス防衛戦を微力ながらも支援した義の持ち主でもあった。

それを見て育ったアランに、自分もそうありたいと思わせる立派な男だった。

二一年の暦も三月を迎えて、その父の命日まで一月を切った。

一周忌の準備で、帝都にあるエイドニア州上屋敷も慌ただしくなっている。なにしろ伯爵家

ともなると、帝族貴族たちをたくさん招いて、盛大な式を催す必要があるのだ。これを疎かにすれば故人が幽霊に化けて枕元に立つと、この時代の一般的なクロード人は信じている。

それはアランも例外ではなく、また当主の彼がしなければならぬ手配は膨大の一言に尽きたが、それこそ先代を彷彿させる貴録と手際で使用人を指揮し、立派に切り回す。

エイドニア州から口やかましい妹を始め、親族一同がぞくぞくと集まってきて、上屋敷は日に日にぎやかになっていく。

しかし——叔父のダグラスが早々に顔を見せた時、屋敷は蜂の巣をつついたようになつた。

彼には父の代から、エイドニア最北領の村々を任せている。帝都から最も離れた場所であり、到着予定は一番最後のはずだった。それがまず親族一同を驚かせた。

またこの叔父には、積年の因縁があるクリメリア州の監視も任せている。それが血相を変えて早馬を飛ばしてきたのだから、親族たちの中でも勘のいい者はキナ臭さを嗅ぎとった。

アランも無論その一人で、玄関まで出迎えた。

「もしやクリメリアで何かあったのですか、叔父上？」

「きよ、拳兵の準備をしておる！ 狙いは我が州だ！」

ダグラスは旅装を解こうともせず早口でまくし立てた。

親族一同がたちまち騒然となる。「忌々しいクリメリアめ！」「暴挙も暴挙ではないか！」「そ

んな無法がまかり通つてたまるか！」などと口々に悪態をつく。

アランも気持ちは同じだが、領主としては実際のな対策に出なくてはいけない。ダグラスにより詳細な情報を求める。叔父はクリメリアの州都グリンデに間者を常駐させており、その情報は極めて正確且つ豊富なはずだ。

「奴らはグリンデに、五百ほどの兵を集めておるそうだ」

「そんなところでしょいな」相槌を打つアラン。エイドニアとクリメリアの財力は拮抗しており、ともに千人程度の私兵を召し抱えている。本来は領地を衛するために養っているその兵を全部、侵略には使えない。半数は残しておかねば自州が乱れる。そして、五百の軍が攻めてきたところで、こっちは倍の兵力で戦える計算だが……。

「進発は三月十三日と、兵に布令を出していると聞いた」

今日から数えて十日も先。やけにゆっくりしているように思えるが。

「どこからの援軍を待っているのですね？」

アランの読みにも、ダグラスは深刻な表情でうなずいた。

それでアランは思索をさらに進める。クリメリアが何を考えているかは知らないが、勝手に戦を起すなどという暴挙に乗る貴族がそうそういるとは思えない。同レベルのおめでたい奴があと一人、二人いるとして、援軍の数は五百くらいがいいところか……。

と——アランがそう計算していた、まさにその時だ。

ダグラスは生唾を呑み込み、それから告げた。

「長槍兵が三千、援軍に届くそうだ……」

脳裏の計算が、木端微塵となった。

さしものアランも愕然とならずにいられなかった。

「そのような大軍、どこから湧いて出たのですか……?」

「デインクウッド公が派遣したという話だ……」

「どうして、デインクウッド公がクリメリアなんかにつ」

アランはうめいた。親族たちからはもう悲鳴が飛び交い、また信奉する神へ救済を祈願した。裏でシャルトが暗躍し、己の祖父とケインズを結びつけたのだと、わかるわけがない。ただただ、敵の背後に四公家の一角がいるという、恐ろしい事実には誰かが打ちひしがれた。デインクウッド公爵ならば、三千ものバイク兵をボンと貸し与えることだってわけはない。

「兄上……」妹のミレイユが——普段は気丈で生意気な十七の少女が進み出て、蒼褪めた顔で言った。「こちらレオナート殿下に救援を求めてはいかがが?」

「馬鹿を言うな……」アランはかぶりを振った。

エイドニアのことで、他の誰にも迷惑をかけられない。

「それではなんのために兄上は、普段からアレクシス騎士隊を支援しておられる？」  
 「少なくとも、僕の私情のためでは決してない」  
 食い下がるミレイユに、アランはびしやりと言った。そのまま外出の準備をする。

「どこへ行かれる、兄上！ まだ話は終わっておらぬっ」

「参内するに決まっているだろう。こんな横暴が許されるのかと、陛下に直接訴え出る。おまへは念のため、エイドニアの兵をいつでも動かせるように早馬を出しておいてくれ」

「それだけでは手緩い！ かのアレクシス騎士たちに救援を求めるのじゃっ」

ミレイユがおも主張するが、アランはもう振りきった。

「兄上の強情っ張りめ！ 勝手にするがよいわ！」

その罵声（ばせい）を背中に浴びながら、帝宮へ向かう。

せめて格好だけでも亡き父のように、背筋を伸ばして。

渾沌大帝は己とその裔（すえ）たる男子のみを尊しとして、残る天下万民を平等とした。

ゆえに彼の大帝国には貴族制度も奴隸（どれい）制度も存在しなかった。

このことは分裂派生した現在の七帝国にも、一部を除いて踏襲されている。

クロードの政治形態はまさにその「一部」の方だった。

奴隸制度は存在しないが、貴族制度は存在するのだ。

遡（さかのぼ）ることおよそ百年前、五代皇帝ゼレマンスの御代（みよ）の話。籠（かご）の外れた好色にして性豪であつた彼は、帝国全土から千人の美姫をかき集めて後宮を満たし、連日連夜の乱交に耽（ふけ）つた。

——結果、彼の美子の数は男子だけで、二百人を超えることとなってしまった。

七帝国の帝室は全て渾沌大帝の末裔であり、七帝国ともに男子の帝族を「神々よりも尊き存在」と僭（せし）称しているが、その度を越してやんごとない人間が、一気に二百人も増えたのである。

これではありがたみも薄れるというもので、クロード帝室の神聖不可侵のイメージを揺るがしかねない事態だった。決して笑い話ではない。

ゼレマンスは愚かにも一計を案じたつもりで、皇太子を除く息子たちを全員、分家として外へ出し、「一段下の尊き存在」として据えることで、帝族の希少性を保つことにした。

しかし当然というべきか息子たちの反発は強く、叛乱（はんらん）の兆（きざし）さえ見えたところで、ゼレマンスは彼らの特権を明文化し、また領地まで分け与えることでどうにか宥（なだ）めた。

それによりクロードの政治形態は中央集権制から封建制に移行し、帝室の力は弱体化した。元は帝室の威光を保つために始めた措置の結果がこれなのだから、本末転倒も甚（こ）ましい。

ゼレマン스가クロード帝国最大の暗君として、歴史に刻まれる所以（ゆえん）である。

ともあれ——その「一段下の存在」として生まれたのが、公侯伯子男の爵位を持つ二百家というわけだ。渾沌大帝の御代より長らく大陸全土で廃れていた貴族制度が、クロード帝国においては二百年ぶりに復活を果たし、百年後の現在も続いている。

ゼレマンズが明文化した特権により、クロードの法のほとんどは貴族には適用されない。それでも、勝手に戦を起こすことだけは、厳に禁じられていた。破れば叛逆罪すら適用された。

クロード貴族が拳兵できるのは、皇帝に勅命しゅくめいを受けた場合、許可をもらった場合、自治防衛権を行使する場合の三つのみ。ケインズが勝手にエイドニアへ攻めてくるのも、ディンクウッド公がそれを援助するのも大罪に当たる。

「ただちに彼らを処断するよう、アランは訴えるために謁見を求めた。どなたであるうとも、順番に御目通りしていただく決まりにございますから」

そう侍従に形式通りの説明をされ、控室に案内される。

個人用の小ぢんまりとした待合室である。しかし壁には華美な装飾が施され、テーブルは南方帝国の白檀製、ソファは北西帝国の匠が手掛けたのだろう一品物。無聊むちようを慰めるための書棚もある。この時代、書物はそれ自体が大層な高級品だ。

(沙汰さたを待つ貴族用の牢獄ろうごくは、こんな風だと聞いたことがあるな……)

アランは嫌な連想をしてしまった。

それを頭から叩き出し、じっと待ち続ける。しかし待たされる間に、次から次へと嫌な想像をしてしまう。クリメリア軍がエイドニアの州境を侵すのはまだまだ先のこと。理性ではそう思えど、故郷の村々が焼かれ、略奪される——この時代、それが戦の常識だ——悪夢のよ

うな光景が脳裏をチラつく。

そして、どれほど待たされたらどうか？

窓から夕陽が差し込む時分になって、ようやく出入り口の扉が外側からそろりと開いた。いよいよかとアランもソファから腰を上げた。

だが、現れたのは取次役の侍従ではなく、若い女官だった。身なりからそれなりの地位だと窺えるが、まるで人目を忍ぶようにコソコソとしている。

「どちら様かな？」

「ポルフェ男爵家の末娘で、ミレイユと申します」

おずおずと答える女官。珍しいものではないとはいえ、妹と同じ名に軽い親近感を覚える。それにポルフェ男爵といえは、人がいいので有名だ。この息女も見るとからにそう。

「こんなところで待っていてはいけません、アラン卿。女官はどこに耳があるかも知れないとばかりに声を潜めて言った。「わたくし、小耳に挟んだのです」

と、彼女が宮廷雀きんざめたちから仕入れた話を教えてくれた。

「陛下はとおの昔にケインズ卿が拳兵する許可と、ディンクウッド公がそれを援助する許可を、公式にご裁可なさっておられます」

アランは目を剥いてそれを聞いた。

「しかしそれなら、然るべき形で公示される決まりだ。僕の耳にも届いているはずだ」

「……その手配を実際に行うべき文官たちが、ディンクウッド公の命で黙殺しているのです」  
「そこまでやるか……」

アランは帝宮内の腐敗崩りと相手方の周到さに、怒りを通り越してぞら怖ろしさを覚えた。  
ここで待ち惚けを食らっているのも恐らく同じ理由だ。侍従どもがディンクウッド公を憚り、  
そもそも謁見の取次など行っていないのだ。

しかし、そもそもその話をすればそれこそなぜ、皇帝はそんな許可を出してしまったのだろうか？  
彼女が疑問に答えてくれた。

「他ならぬシャルト殿下がケインズ卿と奏上をなさって、長年に亘ってクリメリア州の漁業権  
を侵害している、エイドニア州を成敗すべしと……」

「シャルト殿下が!? 本当に!？」

「はい……。それに殿下はどこかへ行かれたまま、しばらく帝宮で姿をお見かけしません」  
聞いて、アランはゾットした。

「殿下はケインズ卿とともにエイドニアへ攻め入るのだらうと、もっぱらの噂です」

同じことをありありと想像できたからだ。

名將や名参謀を数々生み出してきた帝都の軍学校を、首席で卒業するほどの第二皇子が、三  
千五百もの大軍を指揮し、侵略してくる——

アランは考えただけでもう居ても立っても居られず、待合室を跳び出す。

「僕に会うなんて、あなただつて危ない橋だつたらうに……このお礼はいずれ」

アランは妹と同じ名の女官に、両手を握って感謝した。

頬を薔薇色に染めた彼女と別れ、屋敷への帰路を騎馬で飛ばす。

屋敷は静まり返っていた。日没前だというのに灯りもほとんど見えない。

親族たちが未だに意気消沈しているのだらうか？ ——その予測は外れた。

ダグラス叔父を始め、皆が散り散りになって、日ごろから懇意にしている他家へと救援を求  
めに行ったのだ。家宰が教えてくれた。

恐らくはディンクウッド公を畏れ、誰も助けてはくれないだらう。親族たちだつてわかつて  
いるだらう。それでも何もせずにはいられなかったのだ。諦めてはいなかったのだ。

そんな親族たちの行動を知り、アランは覚悟を決めた。

領主の責任というものが綺麗事ではなくどういふものか、背筋を正す想いとともに。

アレクシス州上屋敷は、日没後も煌々と明かりが灯り、騒がしいほどだった。

決意を胸に訪ねたアランは、啞然とさせられた。

レオナートが、シエーラが、バウマンらアレクシス騎士たちが、支度をしていたのだ。  
旅支度と戦支度を。

「なる早やで準備しますからご安心くださいね、アラン様」シエーラが朗らかに笑った。

「アラン卿の妹君があれほどキツイ娘御とは、まさかまさかでしたぞ」バウマンが苦笑した。それでアランは全ての事情を悟る。

黙々と甲冑かっちゆうを点検中の、レオナートの隣に行く。

「……敵は三千五百だぞ？」

「聞いた。厄介だな」

「……しかも、率いるのはどうやらシャルト殿下らしい」

「そうか。ますます厄介だな」

レオナートは言葉短かにそう言いつつも、兜かぶとを磨く手を止めない。

「……………すまんっ」

アランは唇を噛かんだ。

すると初めて、レオナートが顔を上げた。

「気にするな。友達だろ」